

DJ LOST

written by HADEYA (EDOGAWA HADEYA)

1

夜道は極普通だった。極、極、普通。

俺は帰り道を歩いている。愛妻の待つ我が家を。

.....この後、何か起こると思うだろう？ そう、起こるんだ。本当に。全く説明の付かない現象が。

「.....え？」

歩く。極普通に。そこで背後から覆面を被せられた。カづくで。

普通でない夜が始まった。

2

目が覚めた。金属に覆われた部屋で。天井コーナーの黒いスピーカーから声がする。

「ジェラルミン・ケースを開けろ」

無機質な.....人の血の通わないロボットのような声。銀色一色の壁。部屋の中央にコンパクトなジェラルミン・ケース。俺は全裸で——

地獄を体験する事になる。

何故か左手薬指の婚約指輪だけが装着されていた。

この時、感じた痛烈な恐怖.....これが原因ではないか、と思う。エモーション。感情がトリガーに違いない。

「ここは——」

「いいから、さっさとケースを開けろ」

開けた。ケースを。中にはカラフルな色彩のカプセルがビッシリ詰められている。ミネラルウォーターのペットボトルと共に。

再び声がした。

「二つ選んで飲め。どれでも構わない」

「あ、あの——」

「いいから飲むんだよ。妻がどうなっても構わないのか、73号？」

「妻に何をした！」

壁面にマッピングされる——病室が。分娩台に妻は拘束され、暴れている。

「雅美！」

「あなた！ 助けて！ 連中が！ 連中があああっ！」

マッピングが途絶えた。銀色の壁が広がっている。そして、声。

「早く飲め。さあ、早く」

俺は……飲んだ。比較的、地味な色のカプセルを二つ。紫色とダークブルーだった、と記憶している。

……静寂が続いた。俺の心臓は喉から飛び出そうな程、強く脈打っていた。

3

意識が不明瞭になるのを感じる。視界が霞む。謎の透明な流動体が目の前を横切る。流動体は像Tなり、ボヤアと人の形になった。蝶々……二足歩行のモンシロチョウの姿に。手は極端に細く、九の字に曲がっている。短い手が忙しなく動いている。

モンシロチョウが口を開いた。

「あなた……」

雅美——妻の声だった。確かに妻の声だった。思わず言葉を失った。

「私たち、どうなるの？」

言いながら雅美が接近して来る。白くて柔らかそうな全身で。目は黒く、球体だった。手をシャカシャカ擦り合わせている。

後ずさった。雅美が接近して来る。ゆっくり、と。

「逃げないで」

「お、落ち着けよ……」

壁を見た。そこに微かに映る自分を見て、妻は——

気が狂った。

白い羽が暴れ、狭い室内を飛び回る。俺は……叫んだ。

「出せ！ 出してくれ、この部屋から！」

返事はない。懇願し続けた。恐怖に突き動かされ。懇願し続けた。壁を叩き、壁を殴り。俺自身、気が狂う手前だった。

暴れた——室内で。壁を殴り、懇願し、殴り続けた。

……怖い。とにかく怖い。そして……毛髪が抜け始めた。ヒラヒラと毛髪が抜け落ちる。

そして始まったのだ。覚醒が。

4

連中は謎のイルミナティだ。それが日本警察であると知ったのは後の話。俗に言う〈動物虐待ビジネス〉だ。

街中で人間を誘拐し、特定生物に作り変える文化は主に中国で流行っている。圧倒的に日本人の顧客が多い。彼らは離れた安全な場所からモニターしているのだ。この部屋の一部始終を。

毛髪が完全に抜け落ちた。皮膚が紫色に変色して行く。マダラ模様を伴って。

これが何か分かるか？ これが何か本当に分かるだろうか？

悲鳴を上げた。腹の底から。俺はドンドン得体の知れない〈生物〉に変身して行き——

5

夜。悲鳴が聴こえる。施設から。

施設全体が揺らめく。蜃気楼のように。そして施設は消えた。何事もなかったかのように消えた。

その後、俺がどうなったか知る者はいない。

捜索願いを出され、警察が探しているだろう。

これは現実に起きた物語。無論、施設は国有地ではない。施設は——

高尾市にある。精神科の隔離病棟。そして、その施設は事実上、存在せず……ショッピング・モールと化していた。事実上、存在しない施設だ。俺と雅美は選ばれたのだ。何らかの理由で。

「……だから、あなた！ 半ズボンになろうって、言ってるの！」

「ならないよ、絶対にならない！」

モンシロチョウが飛び掛かり、半狂乱で抵抗した。密室で俺は気狂いのような甲高い悲鳴を上げていた。(ア)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872